

石原莞爾の宗教観と世界最終戦争論

一 問題の所在

「満州事変」の立役者であり、「世界最終戦論」(以下「最終戦論」と略示)を提唱した戦前の日本陸軍将校・石原莞爾は、熱心な日蓮信者であった。石原によれば、「満州事変は最終戦争に対する準備」(運9―二六三)だったとされ、最終戦争の予測は彼独自の軍事科学的考察に基づいてなされたが、この予測は日蓮の予言による宗教的裏付けをともなっていたため、石原は、同論に強い確信を抱いていた。すなわち軍事思想としての最終戦論が日蓮の予言を通じて宗教的確信に高められ、やがて太平洋戦争の発端となる満

州事変を引き起こすに至ったのである。そこで石原の最終戦論における宗教的背景が問題となるのだが、従来の石原研究は、田中智学の主宰する「国柱会」等の国体中心的な日蓮主義が石原の最終戦論と結びついた点を強調する傾向にある。

戸頃重基は、石原にみられる「侵略主義の思想」が「明治以来の軍の伝統と国柱会型の日蓮主義との抱合」であると断じ、中濃教篤は、智学の日蓮主義による「世界統一論」が石原によって「本門戒壇建立の時こそ、世界最終戦の時だ」と受けとめられたことを指摘し、小林英夫は「田中の思想は、石原の思想のバックボーンを形成し」たと述べている³。また日蓮主義が石原に与えた思想的影響を、より厳

松岡 幹夫

密に捉えようとした研究も存する。松沢哲成は「日蓮の教義―田中智学によるその体系化―里見岸雄による近代化の徹底」によって石原が「その精神的葛藤を解決され思想的に開眼するところがあつた」と推論し、智学の三男・里見岸雄から石原への影響も考慮に入れている。⁽⁴⁾一方、西山茂は「石原は山川や里見の賢王信仰をさらに発展させて、後述するような独自の「末法二重説(五々百歳二重説)」を打ち立てた」と論じ、里美に加えて智学の高弟・山川智応からの影響も指摘している。⁽⁵⁾これらはいずれも、最終戦論における石原の宗教観が国柱会流の日蓮主義に基づいていた、と見る点では一致した立場に立っている。

なるほど石原は、一説には陸軍幼年学校の時分から智学の日蓮主義に傾倒していたと言われる。⁽⁶⁾大正九(一九二〇)年四月、正式に国柱会の「信行員」となった後は、智学を「大先生」、里見岸雄を「先生」と尊称で呼び、満州や留学先のドイツにあつては智学や山川が著した国柱会出版物を座右に置き、同会の布教活動も活発に行っていた。石原の宗教観を思想的に完成させたものが国柱会流の日蓮主義だった、と言う事実は争えない。だがしかし、彼が晩年にまとめた「日蓮教入門」などを見ると、石原の日蓮信仰の基底部には、日本の古神道等に見られる呪術的な宗教意識――現実の有為転変をすべて宇宙霊の神秘的意志として受

け止める意識――が深く根を張っていたことに気づかされるのである。日蓮信仰に入ってからでも神社参拝を欠かさなかった石原の宗教観は、むしろ神道のシャーマニズムの信仰を基礎としていたのではなからうか。そして、このシャーマニズムの宗教意識を、軍事思想家としての立場から歴史主義的な戦争史観へと展開する方途を模索するうちに、石原は、智学の日蓮主義が最適な宗教思想であるとの結論に達し、国柱会の信者となったのではないのだろうか。本稿では、かかる問題設定を行い、最終戦論の底流にある石原の宗教観について、従前のごとく日蓮主義の影響を指摘して事足れりとせず、今一度、彼の精神形成史に沿って考察を加えてみたいと思う。

二 国柱会入会以前における石原の宗教意識

――靈感的予言信仰と尊皇心

石原が最終戦論を確立した経緯やその内容については、「最終戦争論」「戦争史大観」「戦争史大観の由来記」等の彼の講演録や回顧録によって知ることができる。石原は大正四(一九一五)年に陸軍大学校に入校した頃、日露戦争における日本の勝利が僥倖に過ぎないのではないか、という軍事学上の疑問を抱いた。またそれ以前から、見習士官

として兵の訓育にあたるうちに「一身を真に君国に捧げて居る神の如き兵に、如何にしてその精神の原動力たるべき国体に関する信念感激をたたき込むか」(全一―三)に頭を悩ませ、古神道に答えを求めたりしていたが、最終的に日蓮主義に心を引かれ国柱会の門を叩いたという。これにより、「殊に日蓮聖人の『前代未聞の大闘争一閻浮堤に起るべし。』は私の軍事研究に不動の目標を与へた」(全一―二三)と、石原は述べている。すなわち石原は、今の時代が持久的戦争期にあたるとの見方から、短期決戦で勝利を収めた日露戦争に疑問を持ち、やがて決戦的戦争と持久的戦争を交互に繰り返すという戦争史観に到達した。そして「前代未聞の大闘争一閻浮堤に起るべし」との日蓮遺文を、世界統一を目的とする「世界最終戦争」の予言と信ずるに至って、戦争が決戦と持久戦を繰り返しながら螺旋的に進化を遂げ、最終戦争の後に世界の統一と恒久平和が実現するという戦争史観を打ち立てた。M・ピーティの言葉を借りるなら、石原の戦争論は「進化論的で弁証法的な枠組」を持つており、かつ歴史の終りには千年王国的な平和楽土が想定されていた。

ここで最終戦争は、アジア(東亜)と西洋の代表者・アメリカとの間で行われ、その勝敗によって「天皇が世界の天皇で在らせらるべきものか、アメリカの大統領が世界を

統制すべきものかといふ人類の最も重大な運命が決定する」(全一―五四)と石原は考えた。石原にとっては、日本の天皇こそが「東方道義の道統を伝持遊ばされた」(同前)東亜の盟主でなくてはならず、最終戦は実質的に日米対決となり、しかも日本が勝利し「八紘一字」の世界統一が実現するものと信じられた。石原が描いた最終戦論のシナリオは、日本国体に対する絶対の信念を拠り所としている。

このように彼の最終戦論は、軍事研究による戦争史観、日蓮の予言、国体観念という三つの思想ファクターから構成されているのである。そのうち石原の宗教観に関わるものは日蓮の予言と国体観念とであるが、そもそも石原は、なぜそうしたものを信ずるようになったのだろうか。

まず石原が日蓮の予言を信ずるようになった直接的なきっかけは、国柱会に入会し、その日蓮主義に触れたことだった。しかしながら彼は、日蓮の予言を知る前から神仏の予言を靈感的に信ずる少年だったことが知られている。石原に関しては、元来の靈感的な予言信仰を通じて日蓮の予言に出会った、と云う点に注意を払う必要がある。

陸軍幼年学校、同士官学校で石原と同期生だった横山臣平によると、石原は「幼年時代から靈感を信じ、かつ神仏に対する関心が深く、神社仏閣に対する拝礼を忘れなかった」(少年時代からこのような(最終戦論を指す―筆者注)靈

感的な予言を、真面目に口にすることがしばしばあった⁽⁸⁾

と言う。石原は生涯にわたり、靈感に基づく予言信仰の立場を貫いた。「日蓮教入門」の冒頭には、「科学と宗教の定義」として「科学は五官によって事物を正確に観察し、宗教は五官に感じ得ないところをも直感力によって悟って行くものと定義する」(全7-148五)と述べられている。石原の宗教観は、直観や靈感に依拠した神秘的なものであり、仏や日蓮の予言はじつのところ、彼の靈感の傍証として用いられたとさえ言えるのである。最終戦論の形成過程を見ても、いくつかの重要な節目で、彼の神秘的靈感が決定的な役割を果たしている。すなわち(1)ベルリン留学中、日本の関東大震災の報に接して大ショックを受け、これを「偉大ナル天ノ啓示」「日本ガ凡ヨリ聖ニ入ルノ大関節」(選2-116七)と直観したこと、(2)昭和二(一九二七)年に伊勢神宮へ参拝した際、「国威西方に燦然と輝く靈威」を受けたとし、これを自叙伝に記すなど、重大視していること、(3)昭和一三(一九三八)年、左遷先の舞鶴にて東洋史の教科書的なものを読むうちに日蓮の末法出現に疑問を抱き、種々悩んだあげく、自身の信仰上の直観を頼りに「末法二重説」(後述)を唱えるに至ったこと、等である。石原における、このような神秘的靈感の絶対化は、あくまで經典や日蓮遺文を根拠に予言を考える国柱会の信仰とは明らかに

一線を画していた。国柱会の日蓮主義は、石原自身の宗教的体質と言うべき靈感的予言信仰によって変容し、その結果、自らの靈感を頼りに日蓮の予言を解釈するという、独特の宗教観が石原の内面に生じたのである。

では次に、石原の堅固な国体観念はいかにして確立されたのだろうか。結論から言えば、国体観念は、「教育勅語」を基軸とする天皇制教育、また地方・中央の陸軍幼年学校、陸軍士官学校、陸軍大学校と、十数年間にわたる軍人教育を通じて、石原の人格に深く内面化されていったのである。

石原は帝国憲法が發布された明治二二(一八八九)年に生を受けた。その翌年には「教育勅語」が下され、明治天皇の「御真影」を下付する範囲が高等小學校にまで拡大されている。欧化主義による民権論や対外緊張への反動から国粹主義が起り、天皇主権を明記した憲法の発布に続いて教育の国家統制が始まった明治二〇年代に、石原は初等教育の門をくぐった。彼はいわば、「教育勅語」に基づく天皇制教育を受けた第一世代の人間であり、最初期の人格形成において、天皇への「忠」を至上とする道徳を教え込まれたのである。

そして石原は、明治三五(一九〇二)年、一三歳で仙台の陸軍地方幼年学校に入る。地方幼年学校は、軍人精神の養成を目的とし、その軍人精神は忠君愛国や「軍人勅諭」

の徳目を内容としていた。陸軍教育の研究者・広田照幸は、明治三一（一八九八）年八月の「陸軍幼年学校教育綱領」について、「昭和戦時期の言説にみられた天皇の神性や絶対性の観点よりも、むしろ国民国家としての現実的なサバイバルの必要性から、尊皇愛国の心情の喚起がうたわれていた」と説明する。すなわち明治中期の幼年学校では、昭和戦時期のように熱狂的な国体教育はなかったものの、国防を担う軍人として尊皇愛国の心情が養われた。とりわけ石原が在学した頃の仙台陸幼では、軍人勅諭の記憶や解釈の指導が熱心に行われたと言う。市ヶ谷台の中央幼年学校に進んでからも、「二時半ヨリタタキ起サレ 謹ミテ 宮城前ニ神武天皇ノ御霊ヲ拝シ奉ル」（選9―1―14）と石原の日記にあるごとく、尊皇心を体で教え込まれている。また中央幼年学校や士官学校では、東京という立地もあって天皇や皇室と接触する機会が多く、「天皇への距離の近さ」が強調され、そのエリート意識から生徒たちは天皇制イデオロギーを自らの世界観としていったと言われる。エリート将校を養成する陸軍大学校にまで進んだ石原の場合は尚更であり、陸大の卒業式で彼は、明治天皇臨席の下、成績優秀により恩賜の軍刀を授与されている。

こうして石原の中で、天皇の神化とそれに対する絶対服従の念は不動のものとなっていた。石原自身、「私共は

幼年学校以来の教育によって国体に対する信念は断じて動揺することはない」（全1―22）と述べ、いわゆる「昭和維新」を唱えた際には、心底から「現人神の信仰」（選8―1―163）を訴えている。また敗戦後、「現人神」としての天皇像が崩壊してからも彼の尊皇心は変わらず、「天皇家が全人類の総本家であり、天皇は世界唯一天成の君主であらせられるという信仰」を講演で説き続けていた。後述するが、石原が敗戦を境に、最終戦論の予言にかかわる他の重要主張を次々に変更したことを思えば、彼において国体観念の内面化による尊皇心がいかに抜き難いものになっていたか、が察知されるのである。

以上のごとく、幼少期以来の霊感的予言信仰のうえに、国体観念を内面化する教育の中で培われた「現人神」信仰としての尊皇心が折り重なるようにして、国柱会入会以前における石原の宗教意識は形成されていったと言えるだろう。

三 国柱会の日蓮主義が最終戦論の形成に果たした役割——宗教観と戦争史観との結合

だとすれば、陸軍将校になって以降の石原が、国体観の確立を求めて宗教遍歴を始めたというのは、じつは彼自身

の宗教意識——靈感的予言信仰と尊皇心——を満足させる宗教を求めていたと言うことを意味していよう。石原は古神道、マルクス、マホメット、キリストの教え等に救いを求め、ある時には「洗礼を受けようかと思う」¹³⁾とも漏らしたという。とくに預言者の宗教であるキリスト教は、後々まで石原の心を引きつけ、戦後の彼は「最終戦がなければキリスト教、戦争がおければ日蓮教によってすくわれる」(全一四六九)とも語っている。だが言うまでもなく、キリスト教では石原の尊皇心を納得させることはできない。最終的に彼が到達した理想の宗教は、国体信仰を前面に押し出し、宗教的な予言信仰も有する国柱会の日蓮主義だった。智学の日蓮主義における「日蓮聖人の国体観」は、石原の宗教意識における靈感的予言信仰と尊皇心の両面をも満たすという意味で、石原を「心から満足せしめた」わけである。

国柱会の田中智学は、『法華経』の真理である「一念三千」の法と日本国体とが異名同体である、として国体論的な日蓮主義を創始し、天皇制国家主義の時流にも乗って、さかんに宣伝活動を行っていた。また「八紘一宇」の成語を創唱したと言われる智学は、国体論における神国思想を強調し、早くから汎日本主義(日本による世界統一)を熱心に唱えていた。中央幼年学校時代に同級生の父・南部次郎の影

響で「アジア主義」に開眼したと言われる石原には、この対外的原理としての国体論も大きな魅力だったに違いない。ベルリン留学中の石原が妻に送った書簡集を読むと、「毛唐」への対抗心とアジア人への同胞意識に燃え上がる石原が、携行していた国柱会関係の諸著作に励まされながら、「天業民族」たる日本人による世界統一を夢見ていた様子がよくうかがえる。さらに智学は、日蓮晩年の遺命とされる「本門戒壇」の建立と世界統一を教団の最終目標に掲げていた。その歴史主義的かつユートピア的な信仰態度は、「仏の予言の適中の妙不可思議が私の日蓮聖人信仰の根底である」(全一四一)と断ずる石原に強くアピールしたであろう。¹⁴⁾かくして智学の日蓮主義に帰依するに及んで、石原の靈感的予言信仰と尊皇心は思想的統一の契機を与えられ、一つの宗教観が確立されたのである。

そのうえで智学の日蓮主義が石原に与えた最大の影響は、石原の宗教観と戦争史観とを結合せしめる役割をこの日蓮主義が担い、それによって最終戦論が形成されたと言うことであろう。石原が最終戦論で引用した日蓮の〈最終戦争の予言〉は、智学が明治三六(一九〇三)―三七(一九〇四)年にかけて行った講演の記録(本化妙宗式目講義録)の中に、その原型を見ることができるといえる。

最終戦論の根拠とされた主要な日蓮遺文は、「観心本尊

抄」の「當^ニ知^ル」此四菩薩現^ニ折伏^ヲ時成^ハ賢王^ト誠^シ責^シ愚王^ヲ行^ニ撰受^ヲ時成^ハ僧弘^ト持^テ正法^ヲと、「撰時抄」の「前代未聞の大闘諍一閻浮堤に起るべし」の二つであった。石原は、前者の「本尊抄」における「現^ニ折伏^ヲ時成^ハ賢王^ト誠^シ責^シ愚王^ヲ」との記述を「撰時抄」の「前代未聞の大闘諍」と対応させ、「折伏を現する場合は闘諍は世界の全面的戦争であるべきだ」(全一八三)という主張を作り上げた。石原によれば、日蓮の予言は次のように説明される。

日蓮聖人は将来に対する大きな預言をして居ります。それはどう言ふことであるかと申しますと、日本を中心として世界に未曾有の大戦争が必ず起こる。その時に本化上行が再び世の中に出て来られ、本門の戒壇を日本国に建て、茲に日本の国体を中心とする世界の統一が実現するのだ。かういふ預言をして亡くなられて居るのであります。(全一八〇)

好戦的で汎日本主義的な、この日蓮解釈は、じつは明治中期に智学が主張したところを石原が丸呑みしたものに他ならない。と言うのも、『法華経』從地涌出品に登場する本化上行等の四菩薩が「賢王」として世に出現し「愚王」を折伏する、という意の上記「本尊抄」の文について、智学の『本化妙宗式目講義録』では、「この本化の教を広布せんとする賢王と、本化を信ぜざらんとする多くの愚王との

諍ひとなるときは、ここに世界の大戦争が起る」と解説され、その傍証として「撰時抄」の「前代未聞の大闘諍一閻浮堤に起るべし」の文が引かれているからである。また同書は、賢王が「佛と神明との天祐」によってこの大戦争に勝利し、「世界各国の王臣一同」が正法に帰依して日本天皇から「本門の大菩薩戒」を受け、「天人一如、四海帰一」の大戒壇がここに成就する」とも予測している。(賢王とのヴィジョンは、すでに明治中期、智学が自己の信念として披瀝していたわけである。

軍事研究の上から世界最終戦争の到来を予期していた石原には、宗教的予言として最終戦争の可能性を示唆し、その道義的正当性を唱える智学の国柱会が、石原独自の戦争史観を宗教的に許容する、まことに稀有な教団と映ったはずである。最終戦論は本来、「私の軍事科学的考察を基礎とするもの」(全一五五)だったが、「私の預言は政治史の大勢、科学・産業の進歩と共に、私の軍事研究を傍証する」(全一五五―一五六)役割を果たした、と石原(選三―九六)は述べている。ただし「私の予言」は、単に石原の「軍事科学的考察」を傍証しただけでなく、彼の「軍事研究に不動の目標を与えた」(選三―一六)のであり、実際には「私の預言」なくして「私の軍事科学的考察」が最

終戦論へと結実することなど有り得なかつただろう。智学が説示した「仏の預言」は、石原の軍事研究の成果としての戦争史観を全く次元の異なる宗教の世界へと引き込んだのである。

以上の考察から、石原は国柱会の日蓮主義に出会ったことで、彼の宗教意識における霊感的予言信仰と尊皇心とを統一して確固たる宗教観を確立するとともに、彼の軍事研究上の戦争史観をも宗教思想化し得た、ということがわかる。言い換えるなら、国柱会教学は石原の宗教観を確立せしめる契機となり、さらに彼の宗教観と戦争史観とを結合させるうえで媒介的役割を果たしたのである。かかる業は、「世界統一」の予言を掲げ国体信仰と義戦論を唱える国柱会を措いて、他にはできなかつただろう。われわれとしては、石原の信じた「仏の予言」には国柱会のバイアスがかかっていて、という点を銘記しつつ、論を進めていかねばならない。

四 「日蓮主義の相対化」——「末法二重説」

さて国柱会の日蓮主義に傾倒してほどなく、石原は最終戦論を着想し、そこに自己の宗教観を織込んでいった。けれども石原の宗教観において、彼本来の宗教意識（霊感的

予言信仰や尊皇心）と日蓮主義とは、必ずしもイコールで結ばれてはいなかつた。なぜならば石原は、自身の靈感や天皇に対して絶対恭順の姿勢を貫きながら、かたや日蓮主義の信仰については、究極的には相対化する態度を見せていたからである。

石原は、自らの宗教上の師であるはずの日蓮や田中智学に対し、その無謬性を疑うかのごとき言動を時折、口にした。彼は智学を絶対的に崇敬しているように見えて、そのじつ「大聖人（日蓮のこと——筆者注）の御前では絶対平等だ。われわれは大先生を師としたけれど、大先生のお言葉といえども絶対服従ではない」（全7—四五）と考えていた。²³

智学は「大先生」であるが絶対無謬ではない。ゆえに石原は、最終戦論の宗教的意義を智学の日蓮主義に基づいて論じておきながら、最終戦争の時期については自己の靈感を信じて智学の正統的後継者たちと対立し、自ら作り上げた新説——「末法二重説」——に最後まで固執したのである。

「末法二重説」（石原自身は「五百歳二重の信仰」と言う）を簡単に紹介すると、日蓮は当時の日本仏教界の通説に従って、釈迦仏の入滅を西暦の紀元前九四九年に置き、それから最初の千年を「正法」時代、次の千年を「像法」時代、それ以降を「末法」の時代とし、時代が下るほど人心が荒廃するものと考えた。この末法に突入する時期は、『大集経』

では第五番目の五百年（五五百歳）にあたり、戦乱の絶えない「闘争堅固」の時代であるとされる。日本が末法に突入したのは平安後期の永承七（一〇五二）年であり、日蓮は、仏滅後二七一年の「五五百歳」中に出現した「末法法華經の行者」ということになる。ところが石原は、明治以降の実証的な仏教学の成果を取り入れた東洋史の本を読むうちに、日蓮当時の仏滅年代の算定は誤りであり、正しい推測によると仏滅は紀元前四〇〇年代であるから、日蓮が生れた時代はまだ像法時代であった、と思うようになった。

悩んだ石原は、仏が「神通力」をもって「末法の最初の五百年を巧みに二つに使ひ分けをされた」（全一七八四）とし、本化上行は像法と末法に二度出現するものと解釈すること、で矛盾を解決しようとした。そして近代仏教学の仏滅年代に基づき、「西洋人がアメリカを発見し印度にやって来た時」「東西両文明の争ひが始まり掛けた時」（同前）に眞の末法が始まり、「正にそれが最後の世界的決勝戦にならうとして居る」（同前）のが現在であり、さらに「世界の統一は仏滅後二千五百年迄に完成するものとの推論に達した」（全一四二）のである。ここから「最終戦争が三十年内外に起る」（全一九九）との切迫感が石原に生れ、昭和戦時期の日本を三〇年後の最終戦争に向けて動かそうと奔走したのだが、その時点で彼は国柱会教学から離れ、「私の確信」

「私の想像」「占ひ」（同前）といった自己の靈感や直観を絶対的に信ずる立場に立っていた。

また国柱会の路線から逸脱した後も、最後まで日蓮信仰を貫いた石原だったが、日蓮に関しても、その絶対無謬性を認めていたわけではない。「末法二重説」において仏滅年代への疑問が起こり、日蓮が像法時代に出現したと思ひ始めた時に、石原は「日蓮聖人を人格者、先哲として尊敬しても靈格として信仰することは断然止むべきだ」（全一四一―四二）と考えたことがあった。この日蓮の相対化は一時的なものでなく、病没直前の昭和二五（一九五〇）年四月にも彼は、「日蓮聖人の予言があたらなかつたら、われわれは大聖人を、偉大な思想家と尊敬しても、靈格者として信仰することはやめましょう」（全一四七四）と支持者に語っている。他にも戦後、「たとえ日蓮聖人が落第生とならうともわれわれは惨たんたる最終戦争を回避すべく努力しなければなりません」（全七三三―三五）と公言するなど、敬虔な日蓮信者の口からは出てこないような発言を石原は度々行っている。

宗教によって予言を信ずるのではなく、逆に予言によって宗教を信ずる、というパラドキシカルな信条に基づき、石原は、日蓮や仏教全体さえも裁きの場に置いていた。だとすれば、石原が拠り所とした〈予言〉とは、じつは日蓮

主義を超えた絶対的な何かの導きによるものと考えられるしかない。そして、この絶対的なもの観念が、靈感や尊皇心といった石原自身の宗教意識に由来していたであろうことも論を俟たないのである。

五 石原の宗教観における二つの特徴

——シャーマニズムとシンクレティズム

ならば、石原の宗教意識において絶対者とは一体いかなる実在なのか。石原の宗教観を語るうえで、まず特徴的なのは、彼の呪術的態度すなわちシャーマニズムであろう。

先に「末法二重説」を説明する中で、「仏の神通力」によって上行菩薩が二度出現する、と石原が考えたことを紹介したが、中濃教篤によれば、これは「通俗的な法華経のシヤマニステイックなとらえかた」⁽²³⁾であると言う。「神通力」とは一般に計り知れない超人的な力を言うが、日蓮は「但法門をもて邪正をただすべし。利根と通力とはよるべからず」⁽²⁴⁾と訓戒し、神秘的な通力でなく教義内容（法門）によって宗教の邪正を判すべきである、と指南している。日蓮の予言は、例えば「立正安国論」のそれを見て、予言の出所として『薬師経』の「三災七難」説などが明示されており、また、その理論的背景として人心と環境世界との

本来的不二性を説く天台教学の「依正不二」観があったと言われている。⁽²⁵⁾ 智学の日蓮主義もそれゆえ、通力よりも法門を重んずる立場に立ち、「世界統一」の予言を唱えていたのである。

ところが石原の日蓮信仰は、これとは反対に、法門よりも通力を根本として予言を唱えるものだった。石原において予言とは、仏法を基準に現実を裁くことではなく、むしろ一種の「神がかりである」（全7―三二〇）とされた。「神がかり」はシャーマニズム研究の領域では「憑霊」（Possession）と呼ばれ、佐々木宏幹によれば「憑依・憑霊」がシャーマンの呪術—宗教的特質であるとの見方は、もはや大方の研究者の承認するところ」⁽²⁶⁾だと言う。佐々木は、「憑霊のメカニズムについて実証研究を進める中でその類型化も試みているが、これに基づくならば、石原の呪術的態度は「人格が霊的状况の影響を受けている状況（傍点原著者）」の類型に属すると言える。この憑霊のタイプは、「神霊・精霊が当該人物の身体に入ることもなく、また外側から身体に触れることもないが、彼（彼女）の眼、耳、心を通じてその意志を伝える。彼（彼女）は神霊・精霊の姿を目にすることもあり、声だけ耳にすることもあり、第三人称で語ることが多い」⁽²⁷⁾とされる。

石原の場合、昭和二年に伊勢神宮に参拝した折の霊的体

験が、この類型によって説明されよう。この時の「厳肅な気持」を、石原は昭和一五（一九四〇）年に「国威西方に燦然として輝く靈威をうけ、帰來」（全一―二六）と記しているが、昭和一八（一九四三）年一月、伊地知則彦には「神前に参拝したとき、眼前に地球の姿がみえ、日本から金色の光りが満州に向って光り渡った」とも語ったと言う。⁽²⁸⁾ここでは、神靈が石原の身体に憑依したのではなく、彼の眼を通じて「西方（満州）の国威が光り輝く」という神靈の意志が伝えられ、神靈も第三人称（靈感）で語られている。石原がこの「靈威」に基づき日蓮の予言を考え、満州国建国の使命感を抱いた可能性は高い。⁽²⁹⁾

彼の予言信仰は、まず「靈威」の直観ありき、であった。世界最終戦争の予言は、予言それ自体は田中智字の説に由来するものの、石原個人の靈感が根底的に働いていた事実は否めない。生来の靈感的性格のゆえか、石原は日蓮信仰に入ってから、関東大震災で世界最終戦争の早期到来感を抱いたり、度重なる神社参拝によって靈的体験を得ていた。結局、彼は自己の靈感を捨てて日蓮に帰依したのではなく、反対に自己の靈感を絶対的基準として日蓮の教えを解釈した。最終戦の時期に関わる「末法二重説」について、石原は「日蓮教学の先輩の御意見はどうも之を肯定しないらしいが、私の直感、私の信仰からは之が私の思召にかな

って居ると信ずるに至ったのである」（全一―四二）と述べ、自身の直観的信仰を国柱会の日蓮教学よりも優先させている。石原の日蓮信仰の基底部には、紛れもなくシャーマニズムが存していたと言えよう。

そして、このシャーマニズムのゆえに、彼の宗教観が多神教的、抱擁的なシンクレティズムの性格を帯びていた、という点も見落としてはならないだろう。石原は、諸宗教・思想における予言の適中を検証することで、宗教的絶対者の實在に迫ろうとした。その結果、「日蓮教」が信仰対象として選ばれたわけだが、石原は究極において日蓮の教えを絶対視していなかった。

石原は「宇宙は一大生命体である」（全七―四九五）との見方に基づき、宇宙を一種の宗教的絶対者と見なしていた。むろん彼は日蓮信者として、この〈宇宙生命〉こそが「仏」であり、日蓮仏教で言う「久遠実成の本仏である」（同前）と説明している。ところがそれにもかかわらず、石原は他方で、もしも「世界最終戦争」という日蓮の予言が外れ、平和裏に世界が統一された時には、「堂々たるクリスト教の勝利に満腔の尊敬と信頼をささげるものである。その時は五五百歳二重のわれわれの信仰は明らかにまちがいである」（全七―五六九）とし、キリスト教に改宗することまで公言していたのである。すなわち〈宇宙生命〉は、今は日

蓮仏教の「本仏」とするけれども、予言適中の成否によっては、キリスト教の神かもしれない、というのが石原の考えであった。

思えば石原が入会した国柱会の日蓮主義もまた、法華経の真理と日本国体を表裏一体と見なす特異な仏教思想であり、一種のシンクレティズムの信仰形態を持っていた。そのため石原も、神社信仰と日蓮信仰を並行して行っていたようである。石原は、大正一一（一九二二）年から同一四（一九二五）年にかけてのベルリン留学中、自室の仏壇に日蓮の曼陀羅本尊を安置していたが、同時に「彼の下宿には日本から持参の神棚が祀っており、その下に国旗が垂れてあった。外出先から帰ると、いきなり拍手を打って拝むのは驚いた」という友人（大島駿）の証言も残されている。また「末法二重説」を着想して最終戦論をさかんに宣伝し始めた昭和一四（一九三九）、一五、一六年の石原の日記を見ると、彼は国柱会の信行員としてではなく、個人の立場で、頻繁に神社へ参拝していたことがわかる。石原の日蓮信仰は神仏一致的であり、それは国柱会流の信仰に準じていたと言える。

けれども国柱会が近世日蓮宗の神仏一致論的な伝統を踏まえつつ、仏教と神道のシンクレティズムを展開するにどうまったのに対し、石原の方はさらにキリストやマホメッ

ト、マルクスまでも聖者と見なすような姿勢を示していた。日蓮、神道、キリスト、マホメット、マルクス——これらの人物に共通する要素は、いずれも人類社会の未来を予言したことである。してみれば予言そのものに対するシャーマンの信仰こそが、世界中の予言的思想・宗教を一如と見るような無限抱擁のシンクレティズムへと石原を導いたのだと言えよう。

六 石原の思考様式に見られる〈状況適合性〉

さらにわれわれはここで、石原のシャーマンの信仰態度が日本の伝統的思考様式と深く結びついていた、という点に注目する必要がある。石原は、世界最終戦争の予言について戦後、その不確実性を示唆し、日米を代表者とする東西文明対決の予言に至っては最終的にこれを撤回した。石原の予言信仰には、現実重視の状況倫理がある。国体信仰はもとより、日蓮信仰からも、かかる状況適合的な予言観は生じ得ない。日蓮が信仰の対象としたのは、『法華経』における真理（妙法蓮華経）と無始無終の久遠仏・釈尊であった。これらは現世を超越した普遍者であり、現世的なものを超越者による否定を通じてのみ救済され、肯定される。日蓮の予言は、〈仏法〉を超越的基準として現世を裁くと

ころにその本質的意義があり、日蓮が社会事象の変化に合せて予言を否定・変更するような事態など起り得なかつた。ところが最終戦論にかかわる石原の予言は、状況に応じて否定されたり肯定されたりするような性質を持つていた。石原は日本の敗戦後、すぐさま「私はこの敗戦を考えますのに、神の意志なり」と信ずるのであります」（全7―二八〇）「人間は成るままにしかならず、戦争に勝とうとしても勝てない事もある」（全7―三二八）と語り、あげくには最終戦論の誤りを公式に認めるなど、成行き主義としか思えないような言動を繰り返した。「全人類の永遠の平和を実現するための、やむを得ない大犠牲」（全7―一九二）と確信されたはずの世界最終戦は、戦後、「信仰の如何にかかわらず起きないことを希望する」（全7―四六八）事態に意義が変更された。また石原は、戦前には「最高道義の護持者であらせられる天皇が、絶対最強の武力を御掌握遊ばされねばならぬ」（全1―九五）と、天皇が「絶対最強の武力」を持つ必然性を力説していたのに、戦後は「女々しいとまで思われるやさしさの中に凜然たる覚悟をしめされた平和の女神の如き敗戦日本の天皇のおすがたの中に賢王のおすがたの潜在を拜するものである」（全7―五七〇）と主張し、一転して天皇の意義を非武装の「平和の女神」たることに求めた。さらに「必至ノ運命⁽³²⁾」として連呼された日米戦争

や東西文明の対決の主張は、昭和二四（一九四九）年、連合国総司令官D・マッカーサーに提出された「新日本の進路」の中で、「最終戦争が東亜と欧米との両国家群の間に行われるであろうと予想した見解は、甚だしい自惚れであり、事実上明かに誤りであつたことを認める」として全面撤回された。

このように石原は、大勢の支持者を抱えつつ、自己のイデオロギー的立場を大転換したにもかかわらず、そこには躊躇も慙愧の念も感じていない。すでに確認した通り、石原の信仰はシャーマニズムを基盤とし、シンクレティズム的に「神」と総称される〈宇宙生命〉を絶対者とするものだった。そしてこの信仰に立てば、イデオロギー的信念や宗教的帰依の対象さえも石原の靈感に応じて自在に変更が可能であった。仏の予言と言っても、それが適中するのは〈宇宙生命〉の霊的意志と合致するからに他ならず、宇宙の霊は歴史的現実を通じて予言に最終的な審判を下す。石原はそう考えていた。

だとすれば、すべては状況次第、と諦観する石原の予言にも、それなりの論理があることがわかる。すなわち石原の言う「神」とは、現世を否定する超越者ではなく、あくまで現世的事象の中に立ち現れる絶対者なのである。キリスト教のような予定調和的歴史観と違い、石原の歴史観は、

歴史の流れそのものに絶対の価値を置いている。われわれはここに、丸山眞男がかつて指摘した、日本思想の「原型」的思考様式を見てとることができよう。

丸山が記紀神話の解釈を通じ、いわゆる「古層論」を唱えたことは有名だが、近年刊行された彼の講義録（『丸山眞男講義録「第四冊」』）では、古層論よりも一般化された形で、日本思想を貫く「原型（prototype）」的思考が論じられている。それによれば、日本人の思考様式の原型は神話や古代説話に現れており、呪術的段階における災厄観と罪観念から、「集団的功利主義」「心情の純粋性」「活動・作用の神化」といった行動の価値基準が生れ、活動そのものに重点を置く「生成のオペティズム」の世界像が形成される。この原型の価値意識と世界像が、歴史観に展開されると「自然的時間の経過そのものが歴史である」とする成行き主義に彩られ、また社会行動においては状況適合性がパターンとなると言う。

このような原型的思考は、まさしく石原の歴史観を支配していたと言えるだろう。石原の宗教観においては〈神の計画〉としての歴史など存在せず、自然的時間の経過としての歴史こそが「神」であった。自然的時間の経過もたらしめた日本の敗戦を「神の意志」と捉えたからこそ、戦後の石原は最終戦論の予言を一八〇度ひっくり返しても、恬

として恥じなかつたのである。石原の中では、アジアの盟主を目指した軍国主義の日本も、また戦争放棄を謳う絶対平和主義の日本も、ともに自然的時間の経過という「神の意志」であった。彼の思想転向は、彼自身にとっては、決して変節ではなかつた。石原の思想は丸山の言う「その時々⁽³⁵⁾の状況適合性」を原理的特徴とし、それは日蓮主義と言うより、シャーマン的な宇宙靈崇拜に裏打ちされていたのである。

七 おわりに

石原莞爾は幼少期から靈感的な予言信仰を持っており、就学期には「教育勅語」「軍人勅諭」等の教育方針に基づき、尊皇心を培った。これらはまだ、青年期の石原の宗教意識においては、いわば雑然と同居している状態だった。やがて石原は、陸軍将校として確固たる宗教観を求めようになり諸宗教を遍歴するが、最終的に国柱会の日蓮主義に帰依して真の安心を得た。国柱会の日蓮主義には、日蓮の予言者的な歴史主義に対する熱烈な信仰があり、また国体信仰に基づく汎日本主義と義戦観が含まれていた。それゆえ国柱会教学を通じて、石原は、彼の宗教意識であった靈感的予言信仰と尊皇心を確固たる宗教観に統合し、さらには、

その宗教観と自身の戦争史観とを結合させることに成功した。「世界最終戦争論」はこうして大正一三（一九二四）年頃、呱呱の声を上げ、太平洋戦争の前夜には「末法二重説」を付加し、切迫感を帯びた軍事的・宗教的予言として昭和戦時期に異彩を放っていた。

だがしかし、石原が最終戦論を構想するうえで決定的影響を及ぼした国柱会の日蓮主義と石原の立場との間には、じつは大きな隔たりがあった。それはシャーマニズムの有無である。国柱会の予言信仰が日蓮遺文に基づき——もつともそれは国体論的バイアスのある日蓮解釈だが——および日蓮を離れた予言など認めないのに対し、石原の方は自己の靈感的予言を日蓮遺文よりも優先し、日蓮の立場を相対化していた。

また石原は、国柱会流に神仏一致的な解釈を施された日蓮の予言を信じていたが、その奥底にシャーマン的な宇宙霊の崇拜があったために、状況によつてはキリストやマホメット、マルクスなどの予言を承認する可能性も残っていた。彼の宇宙霊信仰は、無限抱擁的なシンクレティズムともなっていた。

こうした宇宙霊信仰はまた、〈状況適合性〉を基準とする思考様式を生み、そこから戦後の石原における最終戦争の予言の全面撤回や非武装平和主義への転換という、成行

き主義的な言動が正当化されていった。石原の軍事的態度について、その優柔不断性がしばしば問題にされる。代表的な例として、昭和一一（一九三七）年に日中戦争が勃発した当初、中国における日本陸軍の作戦決定の実質的責任者だった石原が、自らは戦争拡大に反対の立場だったにもかかわらず、最終的に拡大派の路線を容認する態度をとつて部下を困惑させた、という問題がある。M・ピーティは、この原因として、石原が東京の最高司令部内で孤立していたこと、彼が北平地域の在留邦人と民間人の安全を懸念していたこと、そして元來病弱な石原が緊張や過剰労働によつて精神衰弱気味になったこと、との三点を挙げているが、これらの外的諸要因に対し、内的要因としては、すべてを神霊の意志と見て諦念してしまう石原の〈状況適合性〉の問題も検討されるべきだろう。

さて以上の論考から、石原の宗教観の中核には一貫して宇宙霊の予言に対するシャーマンの信仰が存したこと、それが国体観念、軍事研究上の知見、国柱会の日蓮主義を取り込むことで日本中心主義的な世界最終戦争論へと展開されたこと、戦後、日本の敗戦という〈靈告〉を前にして石原自ら最終戦論を白紙撤回するという結末を迎えたこと、この三点を結論として提示する次第である。最終戦論における日蓮仏教は、第一に田中智学の国体論的な日蓮主義を

通じて好戦的な汎日本主義の装いを凝らされ、第二に石原のシャーマン的靈感を通じて具体的な軍事行動(満州事変)を正当化する役割をも担わせられた。石原のような日本中心主義的、シャーマン的な日蓮受容のあり方は、同じく日蓮系の超国家主義者と呼ばれる北一輝の思想にも見受けられる。日蓮仏教と超国家主義との関係を考えるには、近代の日蓮系超国家主義者の思想形成における日蓮仏教の変容過程を詳細に検討する作業が不可欠であろう。

*『石原莞爾全集』(全七巻、石原莞爾全集刊行会、一九七六年)一九七七年、『石原莞爾選集』(全一〇巻、たまいらぼ、一九八六年)からの引用・参照箇所は、それぞれ「全」「選」の字とその巻数、頁数を文中に示した。

注

- (1) 戸頃重基『近代社会と日蓮主義』評論社、一九七二年、一四八頁。
- (2) 坂本日深監修、田村芳郎・宮崎英修編『日本近代と日蓮主義』春秋社、一九七二年、八六頁。
- (3) 小林英夫『昭和ファシストの群像』校倉書房、一九八四年、九五頁。
- (4) 松沢哲成『日本ファシズムの対外戦略』三一書房、一九八三年、七六頁。
- (5) 西山茂『近代の日蓮主義——「賢王」信仰の系譜』日本仏教研究会編『日本の仏教』④近世・近代と仏教、法蔵館、

一九九五年、二三七頁。

- (6) 陸軍の中央幼年学校で石原と机を並べていた親友の飯沼守は、石原が当時から智学に関心を持っていたとして、次のように語ったと言う。「石原は中央幼年校の時から、田中智学師の法華経に凝り、その教書を読み、私(飯沼)や樋口李一郎(後の北部軍司令官)にもこれをすすめた。樋口はある程度の関心をもっていたようであったが、私は多少研究したがるものにならず、石原は私に対して『貴公は信仰心がないからだめだ』といった」(横山臣平『秘録・石原莞爾』芙蓉書房、一九七一年、七三頁)。
- (7) M・ピーティ『日米対決』と石原莞爾『たまいらぼ』一九九二年、七二頁。
- (8) 横山前掲書『秘録・石原莞爾』、三四一、三五二頁。
- (9) 広田照幸『陸軍学校の教育社会史——立身出世と天皇制』世織書房、一九九七年、一七七頁。
- (10) 同前、一七八頁。
- (11) 同前、二二八、二五〇頁。
- (12) 石原莞爾平和思想研究会編『人類後史への出発 石原莞爾戦後著作集』展転社、一九九六年、三九頁。
- (13) 藤本治毅『石原莞爾』時事通信社、一九九五年(初出一九六四年)、七五頁。
- (14) 田中智学の自伝(『わが経しあと』)によれば、彼は明治一〇年の西南戦争の際、「一念三千の大道理が真理の中心である。それを形作つたものが日本の国体である」との直観を抱いたという(『師子王全集』「談叢篇」師子王文庫、一九三六年、三三五頁)。彼は終生、「一念三千」国体」と

いう両義的な信念を貫いたが、運動面では次第に日蓮主義から国体主義へと力点を移していった。

(15) 南部次郎については多くの石原莞爾伝が詳しく紹介しているが、中央幼年学校時代の石原は南部家に頻繁に出入りし、南部の王道論的なアジア主義から大きな影響を受けたとされる。南部は明治六(一八七三)年、「大陸問題」(征韓論)に注目して清国に渡り中国革命運動に熱中し、同一九(一八八六)年に内地送還を命じられて明治四五(一九一二)年に没するまでの間は、在野にあつていわゆる「西洋覇道・東洋王道」説を唱えていたと言(佐治芳彦『石原莞爾(上)』日本文芸社、一九八八年(現代書林 一九八四年刊の再刊)、九三―九七頁)。

(16) 石原は、陸軍幼年学校の頃、海軍大学の教官だった佐藤鉄太郎に国防論の教えを乞いに行っていたが、佐藤は、智学と並んで日蓮主義を世に広めた立役者である顕本法華宗管長・本多日生の門人であつた。当然、石原は佐藤を通じて日生の日蓮主義を知っていただろうし、国柱会入会の前にも日生の法話を聞きに行き、大いに心を打たれたと伝えられる(藤本前掲書『石原莞爾』、七五頁)。にもかかわらず石原が最終的に智学の日蓮主義を選んだのは、国策への現実的協力を熱心な日生の日蓮主義に、国柱会のごとき終末論的予言信仰の性格が希薄だったからだと思われる。

(17) 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』第一巻、身延山久遠寺、一九五二年、七一―九頁。

(18) 『昭和定本日蓮聖人遺文』第二巻、一〇〇―八頁。

(19) 田中智学『日蓮主義教学大観』真世界社、一九九三年

(初出一九〇四年)、二六四―八頁。本書は刊行当初、『本化妙宗式目講義録』と題されていたが、大正一四(一九二五)年に『日蓮主義教学大観』と改称し、平成五(一九九三)年に真世界社から復刻版が出された。

(20) 同前、二六四―二六五頁。

(21) 戦中から戦後にかけて石原の側近であり、「日蓮教入門」の編集にも携わつた白土菊江の回想によると、智学が脳溢血で倒れた頃、当時の国柱会ではその病状を云々することすら睨まれる雰囲気があつたにもかかわらず、石原は「大先生も今度はいけならしいですなあ」と言つて白土を驚かせた(白土菊江『將軍 石原莞爾 その人と信仰に触れて』丸ノ内出版、一九九五年、二五一頁)。また智学の死の直後、石原は白土の前で、「にやりと笑つて、大先生の声色をつかい、そり返つた身ぶり」で、智学のことを「あのぢいさん」と呼んだと言(同書、二八六頁)。

(22) 『昭和定本日蓮聖人遺文』第二巻、一四三―二頁。

(23) 前掲書『日本近代と日蓮主義』、八六頁。

(24) 『昭和定本日蓮聖人遺文』第一巻、一九五二年、二〇八頁。

(25) 日蓮の「安国論」思想の根底に、「依正不二」観があることは、多くの研究者が指摘している。例えば小松邦彰氏は、「安国論の主張の根底にあるのは依正不二の思想である」と述べている(『立正安国論小考』『日蓮教学の諸問題』平楽寺書店、一九七四年、二六〇頁)。

(26) 佐々木宏幹『シャーマニズムの人類学』弘文堂、一九八四年、七頁。佐々木は、同書執筆の段階におけるシャーマ

マン、シャーマニズムの学術的定義として、「超自然的存在との直接接触または直接交流（傍点原著者）」という語句・表現が含まれることが最も妥当である」と述べている（同書、同頁）。

(27) 同前、六四頁。

(28) 入江辰雄『日蓮聖人と石原莞爾』たまいらば、一九八四年、二〇五頁。

(29) 同前、二〇六―二〇九頁を参照のこと。

(30) 藤本前掲書『石原莞爾』、三四四頁。

(31) 『石原莞爾選集』⁹に収録された当該年度の石原の日記には、「参宮」「檀原参拝」「多度神社」「南宮神社参詣」「多賀神社参詣」「吉野神宮参拝」「大石神社、石山寺、建部神社」「多賀神社ニ詣テ」「伊勢御親拝」「神武天皇山陵御親拝」「桃山御親拝」「龜山神社参拝」「那智神社ニ参拝速玉神社ニ詣テ」「大雨ノ中プロペラ船ニテ本宮参拝」「諸隊ト共ニ檀原神宮参拝」「北島神社参拝」「石神神宮参拝」「山陵神宮参拝」「天智天皇御陵、近江神宮参拝」とあり、石原が三年間で計二二回、神社や天皇陵を参拝・親拝したことが記録されている。この時期は石原が「末法二重」の疑問をめぐって日蓮遺文を精力的に研究し、彼の自叙伝である「戦争史大観の由来記」を執筆した時期にあたる。石原は、頻繁な神社参拝を通じて神威の靈感に頼りつつ日蓮主義を再解釈し、神仏混淆のシンクレティズムの中で最終戦論を完成させたのである。

(32) 角田順編『石原莞爾資料——国防論策編』原書房、一九六七年、四六、四八頁。

(33) 前掲書『人類後史への出発 石原莞爾戦後著作集』、二〇〇頁。

(34) 『丸山眞男講義録「第四冊」』(東京大学出版会、一九九八年)の第一章「思考様式の原型」(四一―八一頁)を参照。

(35) 同前、七四頁。

(36) 前掲書『日米対決』と石原莞爾』、一三五頁。

(東京大学大学院)